

インテグラル思想研究会
インテグラル思想とエリート主義（第1回）
鈴木 規夫 Ph. D. (Norio001@nifty.com)
2006年4月30日（日曜日）

あらゆる発達理論（時間の流れのなかで創造的に展開する過程を説明する理論）は、必然的に、価値付けをする理論である。そこでは、ひとつの段階が、他の段階と比較して、より価値を有するものであるか否かについて検討・判断がなされるのである。そして、こうした理論が人間（個人・集合）に適応されるとき、少なくともそのときに検討の対象とされている限定された領域においては、高い成長度を有する人間と低い成長度を有する人間とが選別される。

高度の成長段階を確立することは、その個人・集合の可能性（*dignity*）と危険性（*disaster*）を増幅することになるために、結果として、その個人・集合により高度の智慧（責任能力）を開発することを要求することになる。また、自らのもつ能力（可能性と危険性）を自覚して、それを高度の倫理感覚にもとづいて、他者の福利のために建設的に運用することの重要性を強調する姿勢は、発達の視点を基盤とするあらゆる思想に内在するものである（正当な存在価値を有するものとして共同体により認知されるためには、その思想運動は、発達の結果として生みだされる自らの破壊性に対して、有効な対応策を講じることができねばならない）。ただ、こうした姿勢を涵養することを自らの責任として抱擁することができるためには、人間は、実際に発達の過程を体験しなければならない。必要な「介入」（支援と挑戦）の支えのもと、そうした過程を歩むことができたときに、人間は、はじめて自らの獲得した能力に付随する責任を自覚できるのである。つまり、そうした認識は、実際に成長の過程を完遂することができた個人の「特権」といえるものなのである。

インテグラル思想がその重要構成要素として諸々の発達研究の成果を継承するものであるという意味において、それは、紛れもなく、エリート思想であるといえる。それは、あらゆる真の意味でのエリート思想がそうであるように、「特権階級者」が自らの特権に付随する責任を積極的にひきうける覚悟をすることの必要性を認識する。

価値相対主義という水平主義的風潮の蔓延のもと、あらゆる価値判断の妥当性が溶解する時代状況のなか、こうした発想は、ややもすると、これまでに「達成」された価値体系の包括的な溶解に抗おうとする危険思想としてとらえられることになる。^{1, 2} ここで重要なことは、インテグラル思想が、統合的な自己成長の方法論を提示することをおして、常に、全ての人間に自らの能力開発に取り組むことを鼓舞する開かれたエリート主義を提唱していることである。それは、全ての人間に機会を平等に保障するものであり、その意味では、決して「差別的」なものではない。

ただ、そこで構想されているエリート像は、明確な成長の方向性をうちだす、非常に厳格なものである。つまり、個人は、自らの個人としての人格成熟の基盤のうえに、自らの責任範囲を広範囲の世界に拡張することを要求されるのである。現実には、そうした責任をになえる個人というのは、少なくとも現在の歴史段階においては、比較的少数であり、また、今後もそうありつづけるだろう。³

そうした状況において必要とされるのは、下記のことであるといえる。

- ❖ 刻々と変動する生存状況のなかで共同体が生存・発展していくためには、(必ずしも大衆には洞察することのできない) 大局的視野から発想をすることのできる統治エリートが必要とされることを集合的に認識すること。
- ❖ そうした人材を階層として育成するために必要とされるシステムを共同体の重要構造として確立し、また、それを向上しつづけることを共同体の死活課題として集合的に認識すること。

今後、現代社会に蔓延する集合意識の地盤沈下が慢性化・深刻化して、諸々の共同体の機能が溶解する過程で、こうした必要なエリート主義が復権・擁護されることは、必要不可欠となる。⁴

また、今後、惑星規模で人類の生存条件の深刻な劣化(自然資源の枯渇や生態系の崩壊等、人間の生命体としての基盤を崩壊する危機)が急速に顕在化するなかで、文明の持続可能性が疑問視されるようになるとき、こうしたエリート主義が共同体に機能していることは、とりわけ重要になる。そうした状況において、共同体の「存在感覚の増幅装置」(“Atman Project”)としての正当性が溶解するとき(共同体は“Atman Project”の集合的装置である)、普通、人間は、死の恐怖(death seizure)にとらえられ、混乱状態に陥ることになる。そのとき、集合意識をとらえるであろう麻痺状態に陥ることなく、共同体の方向性を説得力のある構想を構築することをおして照明する能力——人格的強靱性、そして、正確な状況把握に根ざした計画構築と計画実現の能力——を自己のなかに有する人材を共同体が統治階層として擁していることは、共同体の生死を決定する最重要条件となるであろう。

ここでは、こうした視野から、今後、必要となるエリート像がいかなるものであるのか、そして、その実現のためにインテグラル思想が課されている責任について検討をしてみたい。

国内のリーダーシップをめぐる諸問題

中西 輝政 (2001) 「いま本当の危機が始まった」 集英社より

❖ 民主主義とは、国民の意識（世論）を尊重することで完結するという誤解の蔓延：結果として、「庶民的感觉」にもとづいて支配層を批判することを民主主義の実践であると誤解する「大衆の聖化」の風潮が蔓延している。また、冷戦後、左派思想にもとづいて展開している「市民運動」もこうした安易な「庶民的感觉」の称揚という盲点を内包している。民意は、しばしば、誤ちを犯すという厳然たる事実を念頭に置くことなしに、「庶民的感觉」や「市民的感觉」を擁護して政治活動を展開する姿勢は、民主主義というものの誤解にもとづくものである（しかし、今日において、こうした大衆迎合的な姿勢をうちだすことなしに政治生命を維持することは、事実上、不可能である。結果として、こうした姿勢は、あらゆる政治家の行動規範となっている）。

❖ 諸外国に比較して、歴史的に、知的領域の指導者と実務領域の指導者の実力（人間的な成熟度）にあからさまな格差が存在する：後者の実力に比較して、前者の実力が非常に劣るために、両者の建設的な共同作業が成立しない。結果として、日本の統治は、過去においては、実務領域のリーダーが知的領域のリーダーの発言をあえて「無視」「軽視」することをとおして、辛うじて成功してきた。

❖ 次世代の統治階級育成のための効果的な教育装置の欠如 #1：歴史的に、第1世代の指導者が、時代の動乱の渦中で実務者として頭角をあらわした人物により構成されるのに対して、第2世代の指導者は、実務領域から隔絶した閉鎖的世界（トレーニング・システム）のなかで育成された人物により構成される。こうしたトレーニング・システムは、普通、新社会の黎明期において、外国のモデルを参考にして構築されるものであるために、必然的に、生徒の文化的特質に対応したものとはなりえない。結果として、第2世代は、こうした歪なシステムにいち早く適応できる特殊な人物により構成されることになる。共同体の現実から乖離した装置のなかでのみ成立する指導者像を内面化したこれらの指導者は、必然的に、共同体（国家・民族）との実感としてのつながりのうえに、自らの使命を構想することに失敗することになる。第1世代は、共同体とのつながりを基盤として自らの使命を構想することができたために、そこには、抽象としての同胞ではなく、具体としての同胞の福利に責任をもつことから発生する、独得の剛毅な活力と倫理が存在しえた。しかし、第2世代は、第1世代には存在しない洗練（例：国際感覚）を獲得することはできるが、国家や民族という集合との実感としての結びつきに根ざした使命感を獲得することはできない。むしろ、社会の安定期において、そうした使命感を「時代遅れ」のものとして嘲笑する風潮が蔓延するなかで、彼らは、統治者としての目標を見失い、活力と倫理を喪失していく。こうした喪失状態において、第2世代は、しばしば、知識人により喧伝される浅薄なイデオロギーを無批判に信奉してしまうことになる。第1世代を特徴づけていた極限状況における豊富な実務経験、

そして、国家や民族という集合との結びつきを喪失した第2世代は、実存的危機状況（“boundary situations”）において自己と対峙する経験をとおしてはじめて獲得できる確かな人間観・世界観を構築することができないために、浅薄な知識人の時代迎合的なイデオロギーに容易に飲みこまれてしまうことになるのである。

❖ 次世代の統治階層育成のための効果的な教育装置の欠如 #2:競争の最初の関門を通過することができれば、その後は、器用に人間関係を管理しながら用意されたコースを歩んでいけば出世が保障されるというシステムは、必然的に、人間を矮小化させる。結果として、こうしたシステムのなかで育成された人間は、既存の体制がいつまでも継続するという幻想にとらわれ、劇的に変化する生存状況に対応することができるよう、自己を鍛錬しつづけることへの気概を見失うことになる。

❖ エリートについての誤解：エリートとは、必ずしも、政治機構・産業機構の統括権限を行使する統治者だけを意味するのではない。健全な民主主義が成立するためには、そうした「統治エリート」と対峙する「対抗エリート」が必要となる。「対抗エリート」とは、歴史・伝統等をふまえた大局的な視野から、「統治エリート」の政策を建設的に批判して、代替案を提供する責任をになう階層のことである。注意すべきは、「対抗エリート」とは、決して、単に「庶民的感觉」と同調して、体制批判を展開することではないということである。むしろ、「対抗エリート」の責務とは、しばしば、時代の表面的な趨勢にからめとられて、誤ちを犯す「世論」や「民意」に敢然と異論をとらえ、また、警鐘をならすことをとおして、共同体の良心（「国家の番人」）としての役割をになうことである。現在、日本に、こうしたエリートを階層として創出する機構が存在しないことは、必然的に、議会制（2種類のエリートによる建設的な討議を目的とする制度）の成熟を阻んでいる。

上記諸問題への対策

❖ 民主主義とは、国民の意識（世論）を尊重することで完結するものではないことを理解する必要がある。今日、人類意識の発達段階の重心は、神話的合理性段階（Mythic-Rationality）である（世界人口の70~80%といわれる）。この段階における、人間の行動論理（Action Logic）は、共同体における自己の役割を忠実に果たすことで、その視野は、あくまでも短期的なものである（数ヶ月）。この段階では、自己の役割そのものをあらしめている共同体の構造が絶対化されているために、歴史的な大局的視野から、今後、共同体が構造的にどのような変化をしていくのかということについて諸々の重要事項を参照しながら積極的に検討することはできない。基本的に、この瞬間に目前に展開している社会構造は、絶対化（神話化）されているために、大局的な視野から、その性質を本質的に検討したうえで、今後の変化の可能性について模索することはできないのである。また、そうすることは、神話的合理性段階における“*Atman Project*”

を麻痺させることになるために、深刻な精神的混乱をひきおこすことになる。必然的に、こうした意識構造を基盤として表明される世論は、真に長期的な共同体の福利を考慮したものとはなりえない。また、たとえ長期的なものであるとしても、絶対化（神話化）された諸条件を根本的に検討したうえで、構想されるものではない。その意味では、共同体の運営の方向性を決定するうえで、必要以上にこうした短期的発想に束縛されることは、中期的・長期的には、破壊的な結果をもたらすことになるだろう。

❖ 知識人の実力を向上するための方策をうつ必要がある。戦後日本における知識人の活動は、戦後、戦勝国により提供された言論の自由のもと、伝統思想との対決という構図のなかで展開した。しかし、実際には、伝統思想は、敗戦により、そのときすでに正当性を喪失しており、そこでの「対決」は、あくまでも勝利を確約されたものであった。結果として、戦後思想は、真の対決がもたらしてくれる「内省の契機」を得ることができず、自己陶醉と自己肥大の悪循環に陥っていくことになる。その間、実社会は、先進諸国との熾烈な経済戦争という過酷な生存競争のなかにたたきこまれることになる。そして、この過程のなかで、戦後社会の基盤を構築する責務をになうことになる実務領域の指導者が輩出されることになる。こうした状況において、常に生死の危機と直面することを強いられた実務領域の関係者にとり、（そうした生存状況における現実から隔離された）知識人による発言がほとんど意味をもたないものとして見なされたのは当然のことである。発達心理学が証明するように、人間の成長をもたらすものは、窮極的には、死の脅威である。今後、日本における知的領域の改革を可能とするのは、「知識人」が、現在のありかたを維持しつづけることが、自らの死につながることを認識することであろう。

❖ 次世代の統治階層育成のための効果的な教育装置を構築する必要がある。とりわけ重要な課題は、これまでの日本の統治階層の世代交代を特徴づけていた問題——第1世代から第2世代に統治者としての重要能力が継承されないという問題——をいかに克服するかというものである。留意すべきは、ここで継承されるべき重要能力として問題とされているのが、意識の内容（contents）ではなく、意識の構造（structure）であるということである。第1世代の指導者が、時代の動乱の渦中で実務者として鍛えあげられた人物であるということを鑑みて、そうした状況において育成される構造がいかなるものであるのかを検討する必要がある。そして、そうした構造を人間の持続的能力として構築するために、いかなるトレーニング・プログラムを構築することができるのかを検討する必要がある。また、第1世代の指導者を特徴づけていた（国家や民族等）集合との結びつきの感覚をいかにして再構築することができるかを検討する必要がある。高潔な責任感覚や倫理感覚は、自らが共同体の運命に責任をになう者であるという矜持を必要とする。そうした感覚を抱くことができるためにいかなる教育を提供することができるのか、そして、そうした感覚を価値あるものとして評価する文化をいかにして構築することができるのか、について検討する必要がある。

❖ 共同体として、エリートの必要性を認識する必要がある。また、エリートには、大別して、「統治エリート」と「対抗エリート」があることを認識する必要がある。成熟した議会制民主主義が成立するためには、これら2種類のエリートの存在が必要とされるにもかかわらず、現在、日本には、このどちらについても階層として創出する機構が存在しない。今後、より緊密な国際的な共同作業が必要とされる時代のなかで、こうした階層を所有しない日本は、国家の代表として適切な能力を有する人材を国際対話の場に送ることができないために、関係国（地域・惑星）に包括的に利益をもたらすような建設的な提案をすることができないばかりか、また、自国の国益を守ることもできなくなることが懸念される。

Vision Logic 段階の意識構造の特徴

Response-Ability（責任能力）

- ❖ Conditional Responsibility（条件的責任能力）
- ❖ Unconditional Responsibility（絶対的責任能力）

人間は、この世界において思いのままに行動することはできない。実存主義心理学の指摘するように、人間は、構造的に諸々の実存的条件に支配された存在である（人間の人生は、必ず死によって終結する。また、人間は、最期の瞬間を完全なる孤独のうちに迎えねばならない）。人生の各局面において人間にできることは、常に、その瞬間にあたえられている条件に支配されており、その意味では、たいへん限定されたものである。しかし、同時に、人間には、どれほど困難な状況においても剥奪されることのない根源的な責任能力が付与されている。それは、あらゆる状況において——それがいかに抑圧的な状況であろうとも——主体性を発揮して対応することができるという能力である。もちろん、そうした主体的な行動をすることが、必ずしも安全なことであるとは限らない。そうした行動を選択したために、自らを過酷な状況に陥れることになる可能性はある（例：強圧的な政権下において民主主義的な政治活動をすることが伴う危険性）。しかし、そうした危険性にもかかわらず、人間には根源的・絶対的な責任能力を発揮する権利があたえられている。

Bruno Bettelheim (1960) は、著書 *The Informed Heart: Autonomy in a Mass Age* のなかで、ナチス政権化のドイツにおける自らの経験にもとづいて、いかに人間というものが、幻想にすがろうとする存在であるかを喝破している。ありあまるほどの情報がありながらも、ユダヤ人たちは、実際に自身が強制的に収監されるまで、強制収容所の存在を認めようとしなかったという。また、収監後も、最期の瞬間まで、その収容所が大量虐殺を目的として建設されたものであることを認めようとはしなかったという。多くの人々は、極度の暴力に飽和した状況においても、それまでに享受してきた平安な日常が継続するのだという幻想

を棄てることができず、最期の瞬間まで、自らのなかに備わっている責任能力を発揮することができなかつたのである。

普通、危機というものは、突然に発生するものではない。そうした状況が実際に発生するまでに、われわれには、さまざまなかたちで有益な情報がもたらされる。ただ、われわれは、そうしたもたらされた情報を適切な危機感をもって受けとめることができないのである。そして、ベテルハイムの指摘するように、そうした情報咀嚼能力の欠如の最大の理由が、人間の心理的な防衛機能なのである。責任能力とは、根本的に、この瞬間に存在する「日常」が実際には脆弱な基盤のうえに成立しているものであることの認識から立ちあがるものである（無常の認識は実存的成長段階における特徴的な認識能力である）。この瞬間に自らが享受する「日常」が永遠に継続するものであると思いきもうとすると、人間は、現在という瞬間が、過去の影響下に成立するものでありながら、同時に創造性と不確実性にさらされているものであることを忘却するのである。

ウィルバーが指摘するように、どれほど有益な情報がもたらされても、それは人間を変容させることはない。情報を咀嚼する能力そのものは、無常という現実を継続的に認識する意識構造を構築することをおして開発されるのである。

リーダーシップという主題について検討をするとき、責任能力を発揮することが不可避免的に伴うことになるリスクについて検討をしておくことが必要となる。（眼前に展開する「日常」を絶対化する短期的・中期的な視野ではなく）大局的な視野に立ち、責任能力を発揮することは、必然的に、共同体において、多数の構成員により「常識」として共有されている共通認識（共通幻想）を対象かすることを意味する。結果として、それは、そこに生活する人々の内部に存在する心理的な均衡状態を揺さぶることにつながる危険な行為となる（人間の心理構造とは、基本的に、自己の均衡状態を保持することをその最高の関心事として機能する）。それは、潜在的に他者の攻撃的な反抗をひきおこし、共同体における自らの所属権を危険にさらすことになるのである。

リーダーシップの発揮という課題は、実際には、自己の内部にそうしたリスクを負うことを覚悟することのできる人格的強靱性を構築することのできる個人においてはじめて現実性をもつことのできる課題なのである（共同体におけるリーダーシップの発揮は、第2・3人称の課題である。これが効果的に実践できるためには、第1人称の課題である自己成長への真摯な取り組みがまず必要とされる）。

参考資料

- 中西 輝政 (2001) 「いま本当の危機が始まった」 集英社
- Bruno Bettelheim (1960). *The informed heart: Autonomy in a mass age*. Glencoe, Illinois: Free Press.
- Bill Torbert and Associates (2004). *Action Inquiry: The Secrets of Timely Transforming Leadership*. San Francisco: Berrett-Koehler.
- Ken Wilber (1981/1996). *Up from Eden: A transpersonal view of human evolution*. Wheaton, Illinois: Quest Books.
- Ken Wilber (1983/2005). *A sociable God: Toward a new understanding of religion*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1995/2000). *Sex, ecology, spirituality: The spirit of evolution*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1997). *The eye of spirit: An integral vision for a world gone slightly mad*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1999). *One taste: The journals of Ken Wilber*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2000). *Integral psychology: Consciousness, spirit, psychology, therapy*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2001). *A theory of everything: An integral vision for business, politics, science, and spirituality*. Boston: Shambhala.
- Wilber, Ken (2002). *Integral psychology: Consciousness, spirit, psychology, therapy*. Boston: Shambhala.

注

¹ もちろん、インテグラル思想は、価値体系の虚構性を明確にした現代思想（postmodernism）の成果を無視するものではない。むしろ、インテグラル思想は、そうした洞察を非常に重要なものとして抱擁するものであるといえるだろう。しかし、インテグラル思想は、そうした洞察を、価値体系を破壊するためではなく、むしろ、価値体系を再構築するために活用する。実際、価値体系の破壊は、人間を価値体系の束縛から解放することはできず、むしろ、人格陶冶（内的成熟）の欠如した状態においても妥当性をもつことのできる最も浅薄な価値体系（自己中心性）への執着を生み出すことになる。現代思想（postmodernism）の無軌道な実社会への展開が、こうした集合的な退行現象を発生させることになることに対して、こうした思想の擁護者はおうおうに無意識である。結果として、彼らは、自らの思想活動をとおして、共同体の規範構造の溶解に参画することになる。インテグラル思想は、現代思想に息づくこうした破壊衝動を「破壊的ポストモダニズム」（deconstructive postmodernism）と形容して、自らをこれに対抗する「再構築的ポストモダニズム」（reconstructive postmodernism）と位置づけている。

² こうした時代状況は、現代日本においても、非常に深刻な破壊的影響をもたらしている。中西 輝政（2001）は、次のように指摘する。

……多くの欧米の知識人は、戦後日本が本格的な政治のリーダーを育成するという文化をあまりにも粗末に扱ってきたのではないかと見ている。そうしたビジョン（「国としてのめざすべき新しい国家像あるいは目標意識」）を語るリーダーは、派閥の均衡や大衆人気の中からは、決して生まれこないからである。どんな社会でもエリートの存在なくしてリーダーシップということは考えられない。にもかかわらず戦後日本は、リーダーとなるべきエリート層の育成を視野の外に置くような、倒錯した民主主義の理解に終始してきた。民主主義とは、国民の意識に従っていれば自然に間違いない選択ができる、あるいは民主主義は世論に従うだけで完結する、こういう民主主義観にこそまさに根本的な問題があった（p. 317）。

「フラットランド」の影響のもと、内的な成熟を志向することの価値が根本的に否定されるなか、集合意識の地盤沈下が進行する状況において、大衆世論をよりどころとして展開する「民主主義」は、退行的なものとならざるをえない。

³ こうした責任をになうことができるためには、少なくとも Vision Logic 段階の意識構造が必要とされる。今日、この発達段階に到達する人口の割合は、先進国においては、2% 程度であるといわれる。また、この数値が、今後、突発的に増大することはないだろう。人類の集合意識の重心が短期的に飛躍することを唱える New Age 思想の主張は、これまでの人間の意識発達の研究・調査

にもとづくものではなく、むしろ、希望的観測といえるものである。

4 戦後、伝統思想と現代思想との対決という構図が成立しなかった日本においては、現代思想の擁護者が、自らの思想活動の盲点を内省することなく、視野を狭窄させつづけたために、こうした集合意識の地盤沈下は徹底したものとして顕在化している。今後、こうした危機的状況に対応する対策として提唱されるものが、戦後、思想界を席卷した破壊的思想への反動として、同様に先鋭的なものとなる危険性があることをわれわれは認識するべきであろう。